

(18) ルーツを考える

わたしのルーツ

自分のルーツを考えたことがありますか？今回は、自分のことから始めて多くの日本人のルーツについて考えてみます。わたしは、札幌生まれですが、父方の祖父は明治維新の頃、能登半島から昔のニシン場である石狩湾沿いの浜益にやって来たことは知っていました。子供の頃、浜益の人たちが札幌の家に来て、浜言葉で話していました。母方は、津軽（青森）の蔦温泉の出身で、やはり浜益に住んでいて、母は父と結婚して札幌に出てきたと聞いていました。成人し、札幌を離れてから、阿岸の苗字は珍しいので父方の出身地を探ることができるのではないかと考えることがありましたが、祖父は、わたしが中学生のときに亡くなっていましたので詳しく話を聞くことはありませんでした。しかし、6才年上の姉は、祖父から加賀百万石の武士で

あったこと、明治維新のときに、一旗揚げる積もりで、能登半島の何処かから北前船に乗って蝦夷地（北海道）へやって来たと聞いていました。あるとき能登半島の地図を見ていたら、阿岸の地名があったのです。能登金剛のもっと先に阿岸川というのがありました。これはなにか関係があると思いました。そこで、今から20年位前に、まだ生きていた両親を連れて、阿岸川を頼りに行って見たのです。そうしたら、阿岸川辺に阿岸本誓寺という古く大きな茅葺きのお寺があり、その住職さんが阿岸さんでしたので、（勝手に）懐かしくもあり訪ねてみました。朝から般若湯（酒の別名）を飲んでいる博学の住職さんが、お寺の過去帳を手繰り、自分の記憶やらをたどって話してくださいました。その一帯は、昔は阿岸郷であって、阿岸姓の土地の郷土がいたのですが、殿様（誰のことか分からない）に謀反を起こして、土地を離れた一族がいる。われわれは、お坊さんの方とは関係なく、そ

うちの一族の流れだろうということになりました。わたしは納得しました。わたしには、一旗揚げ組の血と、謀反の血が流れているのでした。北海道から東京に出て来た人たちは協同的なまとまりが悪いといわれます。北海道としての地縁的感覚がまだできていないのかも知れませんが、多くは一旗揚げ組の子孫です。“旗を揚げる”は、元は戦場で手柄をたてて自分の名入りの旗を立てることです。皆で旗を立てたら目立たないでしょう。また、母は、わたしが子供のときにいいました。お前は三白眼である。信長に謀反した明智光秀も三白眼で、古来、三白眼は謀反の相とされている。気をつけるように。。。小さいときから、上の人ということは聞かない質でした。

北海道へ渡った人たち

最近はどうか知りませんが、30年位前の北海道では、本州の出身地はお互いにほぼ分か

っていました。そして、北海道の地名も元の出身地に関係するものが結構ありました。前田村（加賀の殿様前田候）など。その中で、ちょっとだけ気になるものがありました。札幌の北に、新十津川村がありました。越の国（越前・越中・越後）、津軽（青森）・陸奥（青森・岩手など）・出羽などから北海道に来たのは、比較的近いからだといえましょう。十津川は、紀伊半島紀伊国熊野です。常陸・総国・相模・尾張などを飛び越してどうして、熊野でしょうか。徳川の旧家臣で新政府・新体制が気に入らない人たちも沢山いたはずですが、どうして、徳川家に縁の深い江戸・水戸・駿府からの人が多く来なかったのでしょうか。来たのですが、わたしの周りには、たまたま余り居なかっただけかも知れません。

でも、わたしの仮説を述べます。

最近、梅原猛の「日本の深層」を読んでいて、思い当たるものがありました。日本人のルーツについては、いくつかの説があります

が、わたしの理解を大まとめにします。民俗学者柳田国男は、紀伊半島白浜海岸に椰子の実が流れついているのを見て、日本原人（？勝手に命名しました。すでにあるかも知れませんが）は、太平洋の南から島づたいに黒潮に乗って北上してきたと確信したといわれます。それに対応するように、日本語の中のポリネシア語由来の存在も指摘されています（<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>で見つけました）。日本の先住民族、縄文人を形成します。これに対して、比較的新しい説は、モンゴロイド説でアジア大陸の北の方から直接来たという説もあるようです。これには、血液型の分布による証拠があるという論文があります。いずれにせよ、主に、豊かな原生林の中で生活し、その頃は気候の関係か、クリ・ドングリなどの樹木の多い今の東日本中心に住んで居ました。梅原説では、このころの文化的な中心はむしろ東北地方にあったとします。その後、紀元前3世紀位からアジア大陸

～朝鮮半島伝いに稲作技術をもった騎馬民族が北九州から入り、中国・近畿地方へと広がってきました。温暖な気候、比較的平地の多い地形、豊富な水の供給が水稻耕作に適したからとされます。弥生人です。この時代から日本の人口分布が東西で逆転したという学問的推測があります。縄文人は、次第に追いやられ、九州では肥後（熊本）以南・薩摩～琉球に住むようになりませんが、その間の争いの中で縄文人は、薩摩隼人・熊襲と呼ばれたりします。北の方の縄文人は、越国から、次第に北の方に押しやられ、陸奥・出羽・津軽の方に移動します。そこでは、坂上田村麻呂の蝦夷征伐の話が出たりします。山人・マタギ・鬼と呼ばれ、なまはげ・青森／弘前のねぶた祭りは、それに関係した行事との解釈があります。また、津軽・蝦夷国のアイヌとともに、稲作を取り入れなかった縄文人の名残りと考えられます。さて、紀伊国の縄文人も深い森の中に残ることができたと考えられます。今も残

る熊野・九鬼・鬼ヶ城などの地名から縄文人の居住が比較的最近まであったと考えられませんか。それで、明治維新の前後、どのようにして北海道への移住の呼び掛けがあったか知りませんが、結局住み着いていたのは、縄文人の血を比較的濃く持っていた人たちだったとするのが、わたしの結論です。弥生人の血を濃く持った人たちは、最初から北海道へ移住しなかったか、一度は移住したものの、生活に慣れきれず逃げ帰ったのかも知れません。徳川家に近い人たちは、町風の生活に慣れて、あるいは弥生人の血を濃くもって蝦夷地では生活できなかったのかも知れません。

生活が変わったときに、受け入れられるかどうかは、移住したところの文化、言い換えると基本的なものの考え方に馴染めるかということだと考えます。梅原の記述があります。アイヌ、縄文人には言霊（ことだま）信仰があります。これは、口から出た言葉を尊ぶという考え方で、いったん口から出た言葉は絶

対的なもの、つまり約束は、絶対守るということといえます。“インディアン嘘いわない”と共通します。アイヌとの戦いの中で、シャモ（和人、弥生人）が騙し討ちにしたり、酒を飲ませてごまかしたりということがしばしばあったことが言い残されています。梅原はこういいます。アジア大陸から来た騎馬民族は、戦乱の中国から、恐らくは、敗退の結果、新天地を求めてきたものである。戦争の激しいところでは、勝利することが決着点であり、手段も方法も選ばない。そこでは、嘘も方便と考えます。騙すのは良くないが、騙される方もよくない、とは子供のころに耳にした言葉です。これは、全国的に受け入れられていますか？論理・倫理の物差しが違うことです。今、行われているアフガンでの戦いにも思い当たるところがありませんか。そういえば、近頃の北海道の人は、関西人に一種違和感を感じなくなっているのでしょうか。念のため、これはものの善し悪しをいっているのではあ

りません。若い頃、関西人と接触し始めてときに、“あずましくない”思いをしたことを思い出しました。居心地が悪い、なにやら違和感がある意味の北海道方言です。そこで、阿岸珍説の紹介。“あずましくない”は、普通、否定的に使いますが、初めは“あずましい”という肯定語があった。これは。京風から見た“東(あずま)らしい”の意味で、東風(ふう) 北海道風 縄文人風でないことが、“あずましくない”です。きっと。

参考文献

梅原猛著作集 6、日本の深層、小学館、東京、2000

挿し絵(1) 初秋のニセコ

9月半ばのニセコスキー場から麓と羊蹄山を見て描きました。ニセコには、約50年前北大の学生だった頃からの思い出が詰まっています。今のようなスキー場は未だありませんでした。前日にシール(アザラシの皮)を貼ったスキーで4時間も5時間も膝上までの新

雪をラッセルして、山の裏側の国鉄山の家にたどり着き、翌日は新雪にシュプールをつけながらダケカンバの間を滑り下りるのでした。羊蹄山は、別名蝦夷富士。孤立峰で、吹きさらしです。やはり学生の時。台風がきたときに登っていて、登っていたときに台風がきたのかな、死ぬ思いをしました。